

## 勇気ある信仰 薩摩（さつま）の殉教者



取材協力  
片岡 瑠美子修道女  
(長崎純心聖母会)

「外観はやせ型で背が高く、穏やかで口数が少なく、その行動は慎み深い武士」とドミニコ会のオルファネル神父はレオ税所さいよのことを描写しています。レオは強い意志を持ち、洗礼から殉教までが3か月と26日と凝縮した信仰の中でイエスの生き方を受け入れた人でした。彼について「善に向かつて突進するレオ（ライオン）」「勇気あるレオ」「神の慈悲がその心に触れた人」といった記録が残されています。

税所七右衛門は1570年頃、7代目税所伊賀守の次男として都城に生まれます。身分の高い武士で、彼が24歳の時、領主の北郷加賀守三久ほんこうが移封となって領主とともに平佐ひらさ（現在の薩摩川内）に移ります。

1602年、ドミニコ会の司祭たちが薩摩の甑島しきじまにやってきます。宣教活動を開始しますが、非常に不便であったこともあり薩摩の京泊きやうはくに移動し、1606年6月2日、教会が落成しました。税所は薩摩の平佐で友人のパウロ吉右衛門からキリスト教のことを聞き、1608年3月から5月頃、京泊教会を訪れます。その頃、薩摩の支配者島津氏をはじめ、領主の北郷も武士階級が洗礼を受けることを禁止していました。そ

のため、宣教師たちも武士たちに洗礼を授けることについてはためらいがありました。京泊教会には3人の司祭がいて、そのうちのモラレス神父の記録によれば「殿様は武士がキリシタンになるのを喜ばない。キリシタンになったら殺されるかもしれない。だから洗礼を受けることについて慎重に考えてください」と税所七右衛門にも話しました。しかし彼は「今まで宣教師の話を伺って、人間に救いがあるということ、キリストによって救いが得られることを理解しました。たとえ命を失っても救いから離れません」と答えています。こうして1608年7月22日（マグダラの聖マリアの祝日）に洗礼を受けました。宣教師も領主から咎められることを承知の上で洗礼を授けています。

受洗後、仲間たちは「一時的に信仰を捨てるように」、「心の中で従えばいい」、「殿様に従わないのは武士に反する」などとレオに語り、信仰を捨てさせようとしています。しかしレオは「永遠の命を与えてくださる神様が救いをくださるから、この命を失うことはむしろ私にとって利益です。私は洗礼を受けて、神に命を委ねる決心をしました。けれども仲間たちが表面上だけでも



信仰を捨てるようにと勧めます。魂に反することでないなら殿様に従いますが、信仰によって救いの道を見つけた今は、財産や命を奪われ、あるいは追放されても、信仰に背くことはできません」と明言しています。家臣としての務めを忠実に果たす一方、信仰の問題や魂の救いについては決して譲るうとはしませんでした。

家庭では妻と息子2人の4人家族。レオ税所が洗礼を受けてから3か月後に次男敦吉(7歳)も洗礼を受け、ミカエルと名乗りました。家庭に蒔かれた種が成長していきます。また長男敦元(17歳)には、「お前はすでに理解力がある。もし私の行く所

薩摩の殉教者(1人) 鹿児島教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
レオ税所七右衛門	1608.11.17	川内、平佐	39

について来たいなら、お前の考えで来ることができる」と話しています。殉教を前にして、自分の生きた姿を子どもに示しています。また殉教の前日、「遺言のように」妻に対しては「私の希望はお前が、キリシタンになつて教会に奉仕することだ」と。1608年11月17日、主に倣つて十字架に架けられることを望みましたが、かなえられず、屋敷前の十字路で斬首されました。38歳。

彼の殉教後、遺体は京泊教会の墓地に埋葬されました。夫がキリシタンとして命をささげたことへの妻の理解が見られます。この殉教を通して、夫婦間の信仰に関する理解や信頼関係、また子どもたちに対しては「お父さんの生き方はこうなんだ」と自信をもって示す模範、「自分の意志で選ぶように」と言った子どもへの信頼があります。物静かですが、いさぎよく、勇氣ある信仰をレオ税所の歩みに見いだすことができます。

# 受け継がれていく信仰

## 生月（いきつき）の殉教者



取材協力  
片岡 千鶴子修道女  
(長崎純心聖母会)

フランススコ・ザビエルが1550年に平戸を訪れた時、木村家の人々に洗礼を授け、平戸にキリスト教の種が蒔かれます。その後、松浦家（平戸藩主）の重鎮で生月を支配していた籠手田氏と一部氏が洗礼を受けます。生月に生まれたガスバル西は1558年、2歳の時に父とともに受洗。西家は籠手田氏の家臣として働き、生月で総奉行を務めていました。籠手田氏が平戸の城下町に住んでいたこともあり、実質的には西家が生月を管理していました。

成人したガスバル西（にしげんか）は、ガスバル・トイという息子を持つ未亡人ウルストラ・トイと結婚し、4人の子ども（長男のヨハネ又市、司祭となった次男のトマス六左衛門、三男のミカエル加左衛門、長女のマリア）を授かります。

平戸を支配していた松浦隆信は、貿易のためにポルトガル船の入港を許し、キリシタンに対しては保護する姿勢でした。ところが1599年に松浦隆信が亡くなり、息子の松浦鎮信（しげのぶ）が後を継ぎます。彼は父隆信の葬儀を仏式で行うと決定し、家臣団に葬儀には仏教者として参列するように命じます。籠手田一族に対しても、信仰を捨てた証として葬儀への参列を要請します。籠手

田氏と一部氏は信仰を選ぶか捨てるかの二者択一を迫られ、家臣約600名を率いて長崎に亡命します。

生月の総奉行であったガスバル西は、島に留まって、残った信徒たちの世話をする道を選びます。自分の主人が長崎に亡命したのを機に総奉行職を剥奪され、その後、井上右馬允（うまのうよ）（山田地区）とキリシタン嫌いの近藤喜三（きさん）（館浦地区）が奉行に任命されます。近藤喜三の息子にはガスバル西の娘マリアが嫁いでいました。マリアは再三にわたって舅から信仰を捨てるように迫られ、2〜3年辛抱しますが耐えられなくなり、やがて実家に帰ります。近藤喜三の姑は、マリアに戻ってくるように促しますが、マリアは、信仰を守りたいので戻りたくない」と伝えます。こうして近藤喜三はガスバル西一家の処分を考えますが、そのためには平戸藩主の松浦鎮信の許可が必要でした。

一家の処分にあたり、近藤喜三は平戸の空盛上人（くろしやうじん）と結託して、松浦鎮信に殿の命令でキリシタンを撲滅するように進言します。その上でガスバル西が主君の命令に背いて信仰を捨てないばかりか、島の人々に洗礼を授けたり、信徒たちを励ましたりしていることを松浦鎮信に報告すると、彼は



非常に激怒し、ガスバル西を捕縛して、死刑に処するように命じます。

処刑は、キリシタンに好意を持ち、親友だった井上右馬允に任せられます。井上はガスバル西の家族を何とか救いたいと考えますが、ガスバル西は信仰のために喜んで命をささげることを望みます。処刑にあたり、ガスバル西はキリストと同じように、十字架につけられることを望みますが、井上は日本の風習にないと拒否し、斬首刑を行います。また処刑場はガスバル西の望みに従い、1563年にトールス神父によって大きな十字架が建てられた黒瀬の辻で行われます。処刑後、教会の典礼で葬儀がなされ、彼の遺体は近くにあった教会墓地に埋葬されました。

また領主からウルスラ・西と長男のヨハネ又市にも処刑の命令が下り、翌日、黒瀬の辻近くで処刑され、同じ墓地に埋葬されました。有馬のセミナリオで勉強し、マニラでドミニコ会の司祭となった次男のトマス西神父は1634年、長崎で殉教しました。また広島

にいた三男のミカエル西も同年、トマス西神父をかくまった咎で妻と子とともに処刑されました。

迫害下にあつて古郷を捨てず、残された信徒たちの面倒をみていくガスバル西玄可。領民たちからも深い信頼があつた彼は、生

月島の信徒のリーダー、キリシタンの家庭のモデルとしてすばらしい生き方、また信仰が家庭の中で二代、三代へと受け継がれ、養われていく姿をよく示しています。

生月の殉教者（3人）長崎教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
ガスバル西玄可	1609.11.14	生月	54
ウルスラ西	"	"	54
ヨハネ西又市	"	"	24

ガスバル西たちの墓は過酷な殉教の時代から潜伏の時代にあつても大切に守られ、墓の目印として松の木が植えられていました。その松で造られた十字架が、聖トマス西の列聖式（1987年）の時に、教皇ヨハネ・パウロ二世にささげられました。